

研究

『幼稚園』^{をさなごの園}の原著者

ベルタ・ロングのルーツをたどる 2

ディーター・レドナック(史学博士)

翻訳／ベルガー有希子(公立幼稚園教諭)

解説・写真提供／大戸美也子(幼児教育史研究者)

企業家マイヤー家の人々

1 立志伝の人、H. C. マイヤー

(一七九七—一八四八)

—職人から工場主へ—

ベルタの父H. C. マイヤー(以下、マイヤー氏と表記)は、六歳の時(一八〇三年)にブレーマーハーフエンからハンブルグに家族と移住し、八歳の時には父親の製造した杖を路地売りして家計を助けていた。学歴はほとんどなく、夜間学校(一日二時間開校)にひと冬通い、その後は不定期に通つただけであつた。それが、二十年もたたぬうちに、マイヤー氏は小さな町工場から大企業へと事業を拡大し、「杖のマイヤーさ

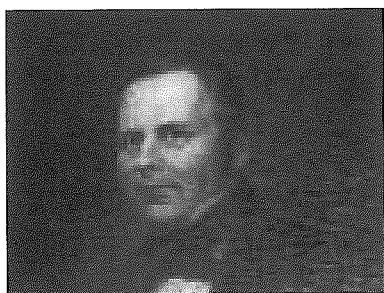
ん」の愛称でみんなから慕われるようになつていた。



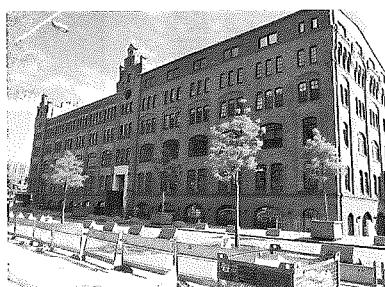
のみならず、未亡人や従業員の家族の健康にまで配慮する先進的な内容であった。工場の従業員を自分の家族の一員のように扱い、そのことにより社員からの信頼も厚かつた。マイヤー工場の製品は、品質の高さで絶大な人気を誇っていた。起業後一年に、四人を雇い入れ、一八二二年には十二人、一八四八年には三百人以上の従業員を抱えるまでになつていた。

—海外事業と社会事業への広がり—

マイヤー氏の事業で、もう一つ特記すべきことは、ハンブルグで初めて工場にスチームエンジンを導入



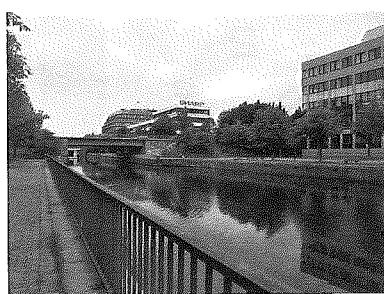
▲マイヤー氏の肖像



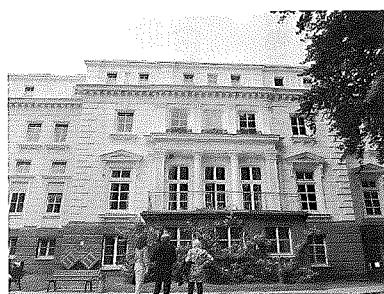
▲杖工場

したことである。取り扱う商品も次第に増え、原料を自分で買い付けに出かけたり、イギリスへの販路もつづった。一八四八年には、アメリカの取引先への訪問と同時に、長男ハインリッヒ・アドルフが興したアメリカ支店（一八四一年開業）も訪れている。

事業が順調に発展するのと並行して、マイヤー氏はハンブルグ市の都市開発事業にも力を入れた。当時、衛生面や経済面で後れを取つていた港湾地域の開発に乗り出し、水路を作り、人々の生活改善に一役買つた。彼の功績をたたえる記念碑はハンマーブルック地区に現存している。



▲マイヤー氏が開発した水路



▲マイヤー家別邸

2 マイヤー家の肖像

—H. C. マイヤーの二人の息子—

マイヤー氏は、富を急速に築いたように、子どもたちの数もあつという間に増やした。一八三三年、彼が

三十六歳の時には、娘九人と息子二人の子持ちとなっていた。しかし、そのうちの三人は早死し、三女ユリアは十一歳で亡くなつたので、成人したのは七人である(写真「マイヤー家の家族の肖像」^{注1} 参照)。妻アガタ(一七九六—一八三三)は、貧しい家庭出身で、二人は夜間学校で知り合い、彼が十八歳の時に結婚し、二人は仲むつまじく温かい空気のあふれる家庭をつくつた。残念なことに、アガタはマルガレーテを出産後に若くして亡くなつた。

—H. C. マイヤーの五人の娘—

マイヤー氏には、五人の娘が成人した。長女アマリー(一八一六年生)、二女ベルタ(一八一八—一八六三)、四女テレーゼ(一八二三年生)、五女アガーテ(一八二六年生)、六女マルガレーテ(一八三三—一八七六)である。マイヤー家の女児の教育については、

者となり、工場をハンブルグからハーブルグへと移し、世界に名だたる藤製品製造会社へと事業を発展させた。長男ハインリッヒ・アドルフは、「H. C. マイヤーの思い出」という本を著わし、父親について次のように述べている。

二人の男児のうち、長男ハインリッヒ・アドルフ(一八二三—一八八九)は、経営者として成功するだけでなく、海洋学者としても一目置かれる専門家になった。また、父親と同じ名前の二男のハインリッヒ・クリスチヤン(一八三三—一八八六)は、父親の後継

あまり語り伝えられていない。二人の兄弟たちのように学校へ通うことはなく、家族同然のつき合いをしていた漫談師、グロイの弟が家庭教師として教育にあたつたに過ぎない。

教育について口出ししなかつたマイヤー氏だが、娘の結婚相手は慎重に選択したようである。一八三四年の春に、長女アマリエは家族の友人であるカール・ヴェステンダルプと結ばれ、結婚後すぐにマイヤー家の会社に就職した。その数か月後には、長女の婿、K.



▲マイヤー家の家族の肖像

ヴェステンダルプの仲介で、二女ベルタは十六歳で、ハノーバー王と結婚したケンブリッジ公爵夫人の私設秘書であつたフリードリッヒ・トラウン氏と結婚した。^{注2}四女のテレーゼは、その父親がブレーメンの商館でフリードリッヒ・エンゲルスのもとで学んだという商人ロイポルド氏に嫁ぎ、また、五女のアガーテはロシアの宮中顧問官に嫁いだ。娘たちが次々と良縁を結ぶことができ、妻に先立たれて意氣消沈していたマイヤー氏も元気を取り戻したといわれている。

3 フレーベル教育に魅せられた娘たち

—フレーベルをハンブルグ市へ招いた長女—

長女アマリエ・ヴェステンダルプは、「貧困者と病人のための女性の会」に属し、早くから貧困家庭の子どもたちの世話をする奉仕活動にかかわってきた。その活動を通してフレーベル思想に出会い、やがてヨハンナ・ゴーレムシュミット夫人の率いるユダヤ教の婦人団体と交流を深めて「ソーシャル協会」の結成に関与したことは、グロレ氏の論文で紹介されている（本

誌夏号参照)。また、この協会でハンブルグ市に幼稚園を開設しようと、幼稚園の生みの親であるF. フレーベルを招いて幼稚園教員講習会の開催を提案したのも彼女であることについても触れている。

彼女はあまり前面に出ることをしない性格であったせいか、彼女についての記述はあまり多くは残されていない。しかし、彼女こそフレーベルに魅せられるマイヤー家姉妹の最初の人物であったことは確かである。

—アメリカで最初の幼稚園をつくった六女—

六女マルガレーテについては、すでにドイツ、アメリカで伝記が出版^{注3}されているので、その履歴について簡単に触れるにとどめたい。

彼女は、誕生時に母親を亡くしたが、しつかり者の娘の多い家族の中で、十分な世話と愛情を受けて育つた。しかし、家系上の特徴か、十一歳年上の長兄ハイシリッヒ・アドルフ同様、理由のない悲しみと憂うつに悩まされることがあった。

マルガレーテは、一八四九—五〇年の冬にハンブル

グで開催されたフレーベルの講習会に参加し、その受講ノートをフレーベルに送ったところ、フレーベルに「自分のものよりも優れている」と評価されたという。一八五一年十月、当時ロンドンに移り住んでいた姉ベルタに請われて、家事と幼稚園を手伝うためにロンドンへ渡った。そこで彼女はカール・シュルツと出会い、一八五二年六月にロンドンでベルタ夫妻立会いのもと民事婚をした。そして、二ヶ月後に、若いカップルはヨーロッパを後にアメリカへと旅立った。

彼らには、新天地での生活プランがあつたわけではなく、シュルツ氏のどんなことにも屈することのないポジティブ思考だけが頼りだつた。そのような楽的な夫とは異なり、マルガレーテは生活の変化に順応するのに苦労した。シュルツ氏は何の資金も持っていないかったため、妻のハンブルグからの持参金で生活を立てていた。フィラデルフィアに住んでいた一八五三年五月三日に、長女アガーテが誕生し、その二年後には、ウィスコンシン州のウォータータウンへ移住した。そこにはドイツからのシュルツ氏の親せきが大勢移住し

ていたので、カールは永住する決心をし、住居と農場を手に入れた。

一方マルガレーテは重度のホームシックに悩まされ、定期的にハンブルグへ戻る生活を繰り返していたが、何か使命を持つ必要性に気付き、子どもの保育の分野に使命を見いだしたのだ。

この時期、アメリカでフレーベルを直接知っている

のは、マルガレーテただ一人だった。まず彼女は、自分の幼い姪たちを自宅に招き、その後、近所のドイツ人子女も集まるようになつていった。そこで、ハンブルグやロンドンの姉のもとで学んだ」と一一緒に歌を歌つたり、遊んだり、積み木を積んだりする」とを実践したのである。自宅が郊外にあつたため、市街地にあるカールの両親が所有する木造の家へ引っ越した。そこはアメリカで最初の幼稚園として、今では修復された建物に記念碑が残されている。

注

1 ノの写真の下方に「一八三四一一八四四」の年号が

入っている。本稿執筆者レドナック博士によれば、この時期に生存していた子どもたちの写真を集めて家族の集合写真を作成したことである。中央の両親を七人の子どもたちが取り囲んでいる。一番上部は長女アマリエ、二段目左側は長男アドルフ、右側は二女ベルタ、三段目左側に四女テレーゼ、右側に五女アガーテ、そして下段左側が二男クリスチヤン、右側が六女マルガレーテの構成となつていて。

二女ベルタの波乱に満ちた生涯については、冬・春号で詳述するので、本号では説明を省いている。

マルガレーテの自伝は、独・米で出版されてゐる。
Gret Stoltz, Leben der Margaretha Meyer Schurz.
(Husum,2007)

Hannah Stewart, Margaretha Schurz.(Watertown:Watertown Historical Society,1967)

後者は、『シユルツ伝』(学苑社 一九八一年)として邦訳され広く知られているが、「マイヤー家はユダヤ教徒」とする等、正確さを欠く記述が多い。

* 夏号 p.70 の注3にある「五女マルガレータ」は「六女マルガレーテ」に訂正いたします（編集部）。